

烈女、畠山勇子を想うハーンと  
モラエスの話  
奥 正敬

### ■はじめに

明治時代の半ばに来日してわが国を世界に紹介したラフカディオ・ハーン(1850-1904)とヴェンセスラウ・デ・モラエス(1854-1929)。それぞれの祖国がアイルランドとポルトガルであることや、来日前の職業が文筆家と軍人であったこと、また日本研究の観点の違いも多いと看做されてきました。しかし、嘗て本学の学長を務めた梶谷泰之氏(故人)は、ある日本人女性の行動に着目した二人の観点の一致した部分を見つけ、それを両者の「接触」と呼ぶことになり

### ■松江、熊本、神戸、東京で活躍したハーン

ハーンはギリシャの西に浮かぶレフカス島で、イギリス軍のアイルランド人軍医とギリシャ女性の間に生まれたといわれています。フランスなどで教育を受け、アメリカに渡ってジャーナリストとして力をつけます。渡米中の文部官僚、服部一三に出会ったことから来日を決意し、1890(明治二十三年)年に横浜に到着しました。服部の尽力で島根の師範学校と中学校に英語教師として就職し、この地の士族の娘、小泉セツと結婚しました。翌年、熊本に移り第五高等学校の教師をしながら、九州各地や関西、四国、関東を訪れています。五高との三年の契約が終わると神戸で英字新聞の社説の執筆を手掛けました。1896(明治二十九年)年には「小泉八雲」を名乗って帰化を果たし、東京帝国大学で英文学の教師として1903(明治三十六)年まで勤めています。翌年、早稲田大学に招かれて教授に就任しましたが、その年の9月に狭心症にて死去しました。彼は来日後、文筆家や作家として日本の歴史や文化に着目し、多くの書物を著して欧米で刊行しました。

### ■神戸から徳島へ移ったモラエス

一方のモラエスは高級官僚の子としてリスボンに生まれ、海軍兵学校を卒業して少尉に任官

しました。モザンビークでの勤務が長く、その間、生物学の研究を進めて成果を発表したこともあったようです。1888年になるとマカオ勤務を命ぜられ、翌1889(明治二十二年)年に初めて神戸を訪れ、その後もマカオの港務副司令として長崎や横浜などへも来航しています。1898(明治三十一年)年には転身して神戸・大阪副領事館の領事代理となり、翌年初代の領事に任ぜられました。彼はこの頃から同棲生活を始めていた福本ヨネとともに、彼女の故郷、徳島を訪れています。1912(大正元)年に総領事に昇格するものの、ヨネが逝去したことから職を退き、彼女の面影を追って徳島で隠遁生活に入ります。やがて、彼はヨネの姪の斎藤コハルと共に生活を始めますが、そのコハルにも先立たれて孤独な日々を送り始めました。この様な中、軍人時代から進めていた文筆活動に専念しはじめ、日本文化についての多くの著作をポルトガルから出版しました。しかし、1929(昭和四)年6月に土間に転落し、打ち所が悪く死亡しました。

### ■大津事件を詫びながら畠山勇子が自害

1891(明治二十四)年5月11日、来日して大津市を訪れていたロシア皇太子(のちのニコライ二世)に警備中の巡査がサーベルを抜いて切りつけ負傷させるという事件が発生しました。所謂、大津事件と呼ばれるもので、大国ロシアの皇太子に対する刃傷沙汰に、政官界はもとより国内は騒然となったそうです。

梶谷元学長は「明治天皇はお見舞いのため、5月21日まで京都にご滞在になっていたが、5月20日の夜、若い女性が京都府庁の門前に白布を敷き、細帯で膝を縛り、露国官吏、日本政府、母親等にあてた遺書10通を置いて鋭利な剃刀をもって頸動脈を斬り、壮烈な自害を遂げていた」<sup>(1)</sup>と述べています。この女性は大津事件を起こした巡査とは全く由縁のない千葉県出身の畠山勇子という人物で、遺書には自分の死を以てロシア皇太子に詫びることを書き遺していました。遺骸は京都市下京区にある末慶寺の住職であった和田準然師の配慮でこの寺に引き取られ、丁重に葬られました。<sup>(2)</sup>そして、勇子の名前は三年後の日清戦争に向かう社会環境下、愛国忠臣の烈女として全国に知られるようになります。